

4. 《万葉集に見る武蔵国の水土》

奈良時代編纂の万葉集には、東歌や防人(さきもり)歌が特集され、そこには、武蔵国の水土が色濃く滲み出ています。ここでは、東歌3首、防人歌1首を紹介しましょう。

まず、「多摩川に 曝(さら)す手作り さらにさらに 何そこの子の ここだ愛(かな)しき」という歌があります。カラムシ(紵：注1)から織った布を多摩川に晒している女性を愛でている詩です。(注2) “さらさら”という言葉から、流れの速さが連想されるとともに、“更に”愛情が増す意味も加わり、秀作といえるでしょう。



次に、「埼玉の 津に居る船の 風をいたみ 綱は絶ゆとも言(こと)な絶えそね」という歌があります。“港の船を繋ぎ止める綱が風で切れても好きな人の便りは絶えませんように”と願っている詩です。読まれた場所は行田市であり、船が生活上欠かせない低湿地であったことが分かります。(注3)

また、「恋しけば 袖も振らむを 武蔵野の うけらが花の 色に出な、ゆめ」という詩は、“恋しくなったら袖を振ってください、決して武蔵野のうけらの花のように目立ったことをしないでください”という内容です。「うけら(注4)」の花は、客観的に見て地味ですが、それが派手だと認識されていたわけですから、関西に比べて地味な関東は、万葉の時代からだったのですね。



防人歌として紹介するのは、「我が行きの 息づくしかば 足柄の 峰這(は)ほ雲を 見とと偲(しの)はね」です。都筑郡(横浜市・川崎市の北部)から福岡に徴兵された人が詠んだもので、“私が旅に出て辛かったら、足柄の峰を這う雲を見ながら、偲んでください。”の意味。防人は、成人男子を対象に出兵義務を課したもので、さらに旅費は個人持ちという過酷な税でした。

注1：麻は、複数の植物から取れる繊維ですが、多摩川の麻はイラクサ科カラムシから採取していたと考察。

注2：東京都狛江市に句碑があります。松平定信が書いた句を移設復刻したもの。調布市や世田谷区砧(きぬた)という地名は、当時の布の生産地であったことを示します。

注3：埼玉県行田市埼玉に句碑があります。舟は交通や漁業での必需品と推定されます。

注4：「うけら」は、その根に薬効があり、京都八坂神社の「オケラ祭り」のオケラとして
焼かれ、また粉末を入れた酒が正月のお屠蘇です。

